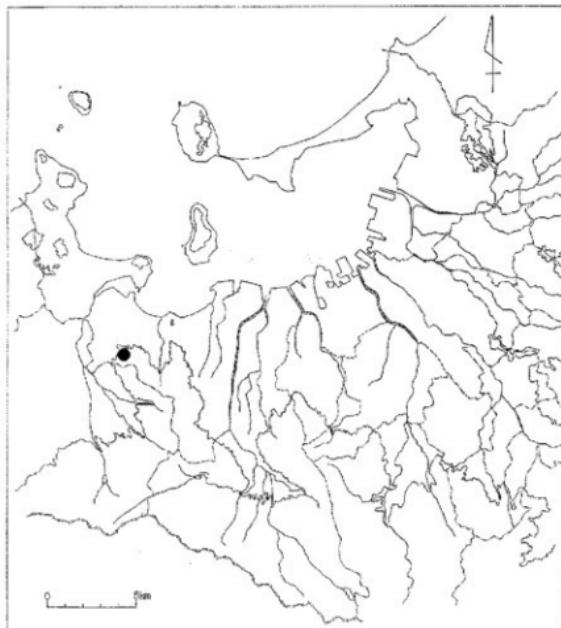


# 飯氏古墳群B群第14号古墳

福岡市西区飯氏所在前方後円墳の重要遺跡確認調査

↑85

福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集



1 9 9 8

福岡市教育委員会

## 序 文

福岡市西部に位置する今宿平野は「魏志倭人伝」に記載がある「伊都国」に含まれることから、重要な遺跡が数多く残されています。特に、古墳時代には13基の前方後円墳が作られており、古墳時代の伊都地域の首長層の系譜や当時の社会体制を考える上で、大変重要な地域です。

これまで福岡市教育委員会では、今宿平野に所在する前方後円墳の歴史的意義付けのため、重要遺跡確認調査を行ってきました。今回報告する飯氏B14号墳の調査もその一貫で行われたものです。本書は平成8年度に行ったものですが、今宿平野の前方後円墳の終末を考える上で、大変貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財への理解と地域の歴史を知る上での助けになり、また研究資料として御活用いただけましたら幸いです。

最後に調査に御協力をいただきました地権者の田中亘様をはじめとする関係の方々には厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例 言

- 1 本書は平成8年度に福岡市教育委員会が国庫補助金を得て、平成9年2月28日～3月28日まで行った、飯氏B14号墳の重要遺跡確認調査の報告である。
- 2 本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は米倉秀紀・星野恵美が行った。
- 3 本書に掲載した遺物の実測は大塚拓史が行った。
- 4 本書に掲載した遺物の写真撮影は米倉・大塚が行った。
- 5 本書に掲載した製図は米倉・大塚が行った。
- 6 本書の遺物番号は通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。
- 7 本書の編集・執筆は米倉・大塚が行い、執筆の分担は各文末に記した。
- 8 本書に関わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号 9674 遺跡略号 I I J - B14 分布地図番号121-0699

調査地地積 福岡市西区大字飯氏字正善寺地内

調査面積 28m<sup>2</sup>

調査期間 1997年2月28日～3月28日

## 目 次

### 本文目次

序文・例言	
目次	
第一章 はじめに	1
第二章 遺跡の位置と環境	2
第三章 調査の記録	4
(1) 調査の経過	4
(2) 墳丘	4
(3) 石室	6
(4) 出土遺物	8
第四章 まとめ	13

### 挿図目次

第1図 今宿平野の主な遺跡	
第2図 飯氏B14号墳位置図	2
第3図 現況測量及びトレンチ位置図	3
第4図 トレンチ土層断面図	5
第5図 石室実測図	7
第6図 出土遺物 I	9
第7図 出土遺物 II	10
第8図 出土遺物 III	11
第9図 出土遺物 IV	12
第10図 伊都・今宿地域の横穴式石室	15

### 図版目次

図版 1 調査前の状況と遺物出土状況	16
図版 2 石室の状況	17
図版 3 上 土層断面とくびれ部の状況	18
下 出土遺物 I	18
図版 4 出土遺物 II	19



- |            |              |             |             |             |                |
|------------|--------------|-------------|-------------|-------------|----------------|
| 1. 棚氏二塚古墳  | 11. 本村A1号墳   | 21. △ E群    | 31. △ C群    | 41. 谷上古墳群C群 | 51. 本村古墳群A群    |
| 2. 棚氏B14号墳 | 12. 路崎古塚     | 22. △ I群    | 32. △ D群    | 42. 稲原古墳群D群 | 52. 新見原跡       |
| 3. 丸削山古墳   | 13. 棚氏(史跡)古墳 | 23. △ G群    | 33. △ E群    | 43. △ 3群    | 53. 今山遺跡・今山下道路 |
| 4. 山ノ森2号墳  | 14. 山崎古墳     | 24. 他糸占墳群A群 | 34. 所謂古墳群B群 | 44. △ A群    | 54. 今西溝跡群      |
| 5. 山ノ森1号墳  | 15. 棚氏古墳群A群  | 25. △ C群    | 35. △ C群    | 45. 相原古墳群C群 | 55. 今市丘部江道跡    |
| 6. 若八幡古墳   | 16. △ J群     | 26. △ D群    | 36. △ D群    | 46. △ E群    | 56. 斎藤古墳群A群    |
| 7. 下谷古墳    | 17. △ B群     | 27. △ G群    | 37. △ E群    | 47. △ F群    | 57. 鶴崎古墳群B群    |
| 8. 女原C14号墳 | 18. △ F群     | 28. △ H群    | 38. △ F群    | 48. △ G群    |                |
| 9. 今宿大塚古墳  | 19. △ C群     | 29. 女原古墳群A群 | 39. 谷上古墳群A群 | 49. △ H群    |                |
| 10. 谷上B1号墳 | 20. △ D群     | 30. △ B群    | 40. 谷上古墳群B群 | 50. △ J群    |                |

第1図 今宿平野の主な道路 (1/25000)

## 第一章 はじめに

### 調査に至る経緯

飯氏B14号古墳は福岡市西区大字飯氏字正善寺に所在する全長25m前後の前方後円墳である。福岡市教育委員会では、今宿平野に点在する13基の前方後円墳について、将来的に保存するための資料収集を目的に、重要遺跡確認調査を行ってきた。これまで今宿大塚古墳、鏡崎古墳、山ノ鼻1号・2号古墳、飯氏二塚古墳、兜塚古墳、谷上B1号古墳の調査を行ってきた。また重要遺跡確認調査以外では、若八幡古墳、丸隈山古墳の発掘調査が行われている。

今回の調査も上記重要遺跡確認調査の一環として行った。飯氏B14号古墳は、今宿平野の西部というよりはむしろ糸島平野東部に所在する小形の前方後円墳である。時期的に前方後円墳の終末期に属する可能性が高いことが調査前から考えられていた。調査前の状況では平面形の全体的な形状は前方後円形を呈しているものの、明確ではなかったため、前方後円墳かどうかの確認を最大の目的に調査を行った。また石室はすでに開口しており、天井の隙間等から大量の土砂がはいっていたため、土砂を撤去して床面清掃を行って石室の実測を行うこととした。

現状保存が前提であり、樹木の伐採はほとんど行わなかつたため、地形測量やトレントの設定に苦労した。また他の緊急調査等の影響により、本古墳の調査期間を1ヵ月しかとれなかつたので、クビレ部のトレントしかあけることができず、石室清掃も羨道部については床面を検出するまでにはいたらなかつた。

### 調査の組織

調査は以下に示す組織構成で実施した。調査に際しては地権者の田中亘・美奈子御夫妻に調査の趣旨をご理解いただき、快く調査に応じていただいた。

地権者 田中亘・美奈子氏

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第1係長 横山邦輔（前任）・二宮忠司

調査担当 米倉秀紀・星野恵美

庶務担当 内野保基

発掘作業 徳重忠子・西田マキエ・柴田シズノ・森友ナカ・犬童陽子

黒ツギノ・小金丸ミネ子・間セツ子・有吉貞江・末松美佐子

波多江昌代子・友池富美恵・徳重コマキ

整理作業 蜂須賀博子・竹田弘子・柴田加津子・萩本恵子

## 第二章 遺跡の位置と環境

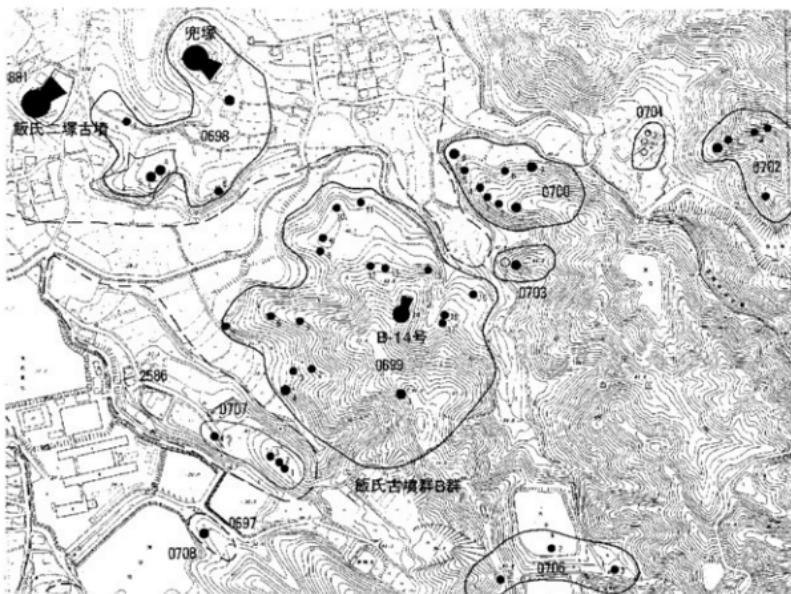
### 立地と占墳群の状況

飯氏B14号古墳は福岡市西部の今宿平野の西端南側、糸島平野の東側にある丘陵上に位置する。この丘陵は、高祖山から北に伸びる無数の小丘陵群の一つで、そのもっとも西端近くに位置する。この丘陵は頂部の幅5m前後と幅の狭い丘陵である。この丘陵の先はかなりなだらかになっているが、その先端部に平成6年度に調査を行った兜塚古墳がある。丘陵の西側には糸島平野が開け、北側には今宿平野がある。墳頂部の標高は64.575mを測り、丘陵下のなだらかな部分との比高差は約40mを測る。下から登ればかなりきつい勾配である。現在は樹木が生い茂り眺望がきかないが、往事は絶好のロケーションであったと想像できる。

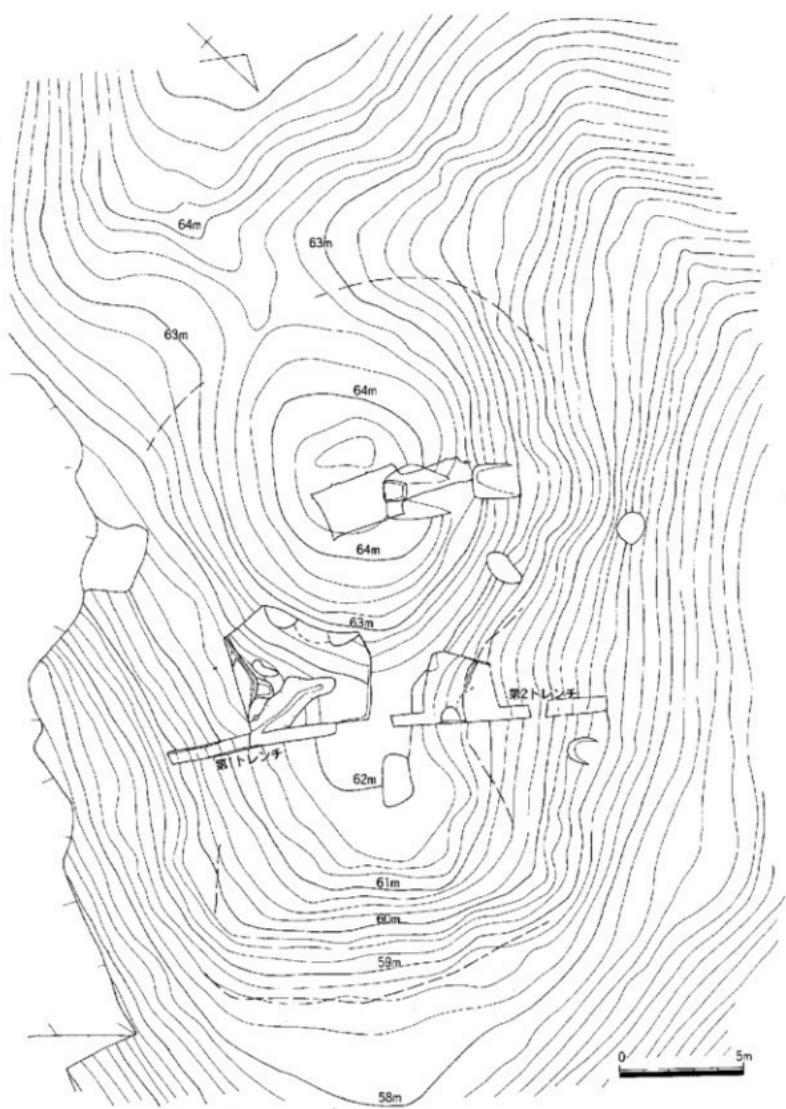
飯石古墳群B群は18基の古墳から成る。前方後円墳は14号墳1基のみである。このうち12号・13号・15号はすでに石室が開口している。12号と13号は低墳丘の古墳で、小型の竪穴式石室を有している。墳丘は残りが良く、墳丘径は10m前後である。15号は小型の横穴式石室を有し、墳丘の遺存度は悪い。墳丘径は10m前後であろうか。

なお周辺の遺跡や今宿平野の前方後円墳については、[兜塚古墳](#) や [「谷上古墳」](#) を参照されたい。

(米倉)



第2図 飯氏B14号墳位置図 (1/4000)



第3図 現況測量及びトレンチ位置図 (1/200)

### 第三章 調査の記録

#### (1) 調査の経過

調査は平成9年2月28日に開始した。まず兜塚古墳周辺の基準杭よりレベル移動を行った後、墳丘の現況測量を行い、その後、石室の清掃にかかった。羨道の上部の土砂を撤去した後、玄室の土砂を撤去した。しかし石室内にたまたま土砂の量は予想以上に多く、玄室は完全に土砂を撤去したもの、調査期間の関係上、羨道部下部の土砂は撤去しきれず、羨道部の実測も土砂を撤去し得た部分までしか行っていない。

石室実測と並行して、両くびれ部東側に南北方向の2本のトレンチをいたれた。墳丘南側のトレンチを第1トレンチ、北側のトレンチを第2トレンチと名付けた。その結果を参考にして、くびれ部にむけてその2本のトレンチを後円部の一部まで拡張し、両くびれ部の検出に努めた。第1トレンチを広げた調査区を第1区、第2トレンチを広げた調査区を第2区と呼んだ。第1区は墳頂部近くまで広げられたが、第2区は樹木があったため墳頂部まで広げられなかった。掘り下げ終了後、両トレンチと石室の途中まで埋め戻しを行い、同年3月28日に調査を終了した。

なお上記のように、調査期間不足のため、羨道の床面の未検出、長さの未確定、墳丘築造の状況など、さらに調査を行う必要があるため、平成9年度も継続して2次調査を行った。  
(米倉)

#### (2) 墳丘 (第3・4図、図版1・3)

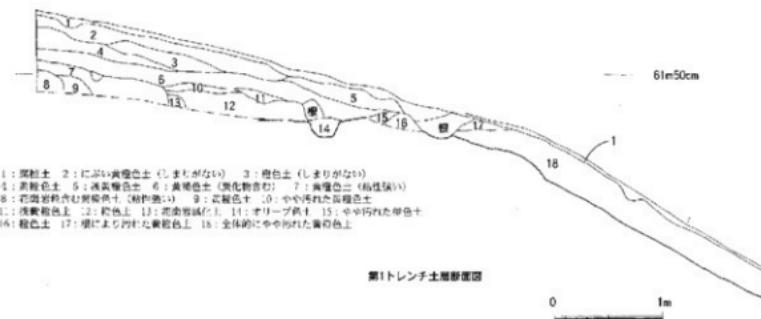
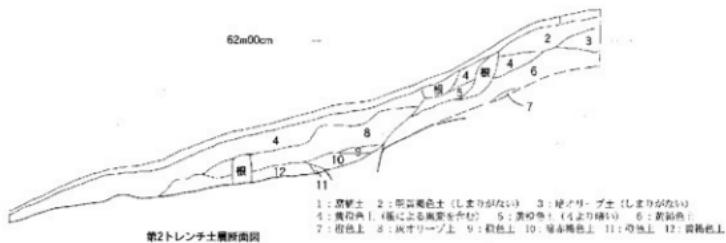
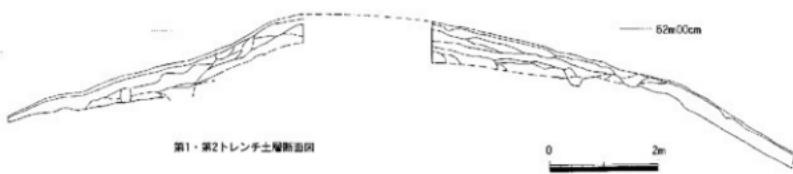
現状の墳丘を見ると、後円部の西側(山側)は地山整形によって溝状を呈しており、構築時の状況がよく遺存している。墳丘の南北両側は谷で急激な斜面を成し、墳丘盛土の流出が進んでいると考えられ、特に両くびれ部周辺と前方部東半のセンターが本来のラインから大きく崩れている。現状ではこの部分の裾部の認定はできなかった。一方前方部の東側は幅約4mの平坦面を形成し、その先はまた急激な斜面に成っている。この平坦面の西端が裾部と考えられる。現況の全長は27m前後を測る。

墳丘には葺石や埴輪の樹立は認められない。また現況で見る限り段築の痕跡も認められない。墳丘は丘陵の傾斜に沿って後円部から前方部へ向けて低くなってしまい、後円部と前方部の比高差は約2.5mを測る。後円部の標高は64.575mを測る。

くびれ部幅は8.5mを測る。南側くびれ部は墳丘との境に明確な段差を設け、その外に平坦面を作っている。北側くびれ部も墳丘下に狭い平坦面を作り出しているが、くびれの付近に樹木の根が多数あったためか、くびれのコーナーは明瞭な形ではなかった。

盛土は主に花崗岩の風化土が用いられている。最初にあけた2本のトレンチは、墳頂近くでは地山面まで出してないため、墳丘の構築状況は明確に知り得ないが、トレンチ部分の盛土は最大で1m以内と考えられる。

両トレンチとも墳丘の遺存面上には、須恵器・土師器の破片がまとまった状態で多く出土した。墳頂部近くでは須恵器壺の完形品の他、甕や高壺が見られ、斜面から墳裾下では須恵器の甕の破片が転々と出土した。  
(米倉)



第4図 トレンチ土層断面図

### (3) 石室（第5図、図版2）

前述のとおり、石室内には大量の土砂が埋まっており、その除去に思われる時間を費やしたため、羨道部の床面は検出するまでにいたらなかった。石室に使っている石のほとんどは花崗岩で、面取りなどの精緻な細工は行っていない。石室は単室の横穴式石室で、石室全長は羨室床面未調査のため正確ではないが、約6.2mを測る。

#### 玄室

玄室の床面は盗掘や樹木の根のためほとんど遺存せず、わずかに奥壁左隅と左袖石部分で床面らしき面を確認したが、やはり樹木の庇根のため土が軟化しており、いさか不明瞭である。埋土内には小礫があったが、床面上では敷石等は確認できなかった。玄室の奥壁幅2.00m、右側壁長3.34m、左側壁長2.92m、袖部幅2.02mを測る。右側壁が左に比べ、奥壁部分も袖石部分も突出したやや歪んだ長方形のプランを呈している。石室の長幅比は右壁で1.67:1、左壁で1.46:1を測る。

奥壁は床面からの高さ1.5mの大石1枚を腰石として据えている。その上に高さ0.3mの横長の石を積み、3段目は高さ0.6m、4段目は高さ0.3mの石を据え、天井に行くほど幅を狭め、天井部での幅0.4mを測る。各段と段の隙間に小礫を充填補強している。

右側壁は高さ1.0mに据えた2石を腰石としている。2段目、3段目は高さ0.4~0.8mの大振りの石を積み、横方向に目地が通る。隙間は小礫を充填し補強している。4段目は横方向に目地を通すが、石の大きさはムラがある。5段目は長さ10~15cm程の石を積み、その上に天井石を架けている。

左側壁は高さ1.0~0.6mの大石1枚を腰石としている。2段目は高さ0.3~0.6mの石を使い、横に目地を通して通しているが、羨道部までは通らない。3段目に至って横に目地を通して通している。4・5段目も石の大きさは揃っていないものの、横方向に目地を通して通している。左側壁は右側壁に比べ、隙間に充填する小礫が少ない。

玄門は大振りな横長の石を袖石とし、その上に2段積んで楣石を架ける。楣石の上に1段積んで天井部に至ると思われるが、崩落のため現存しない。楣石から天井までの高さは約1.5mを測る。天井石は1枚の石のみで構成されている。

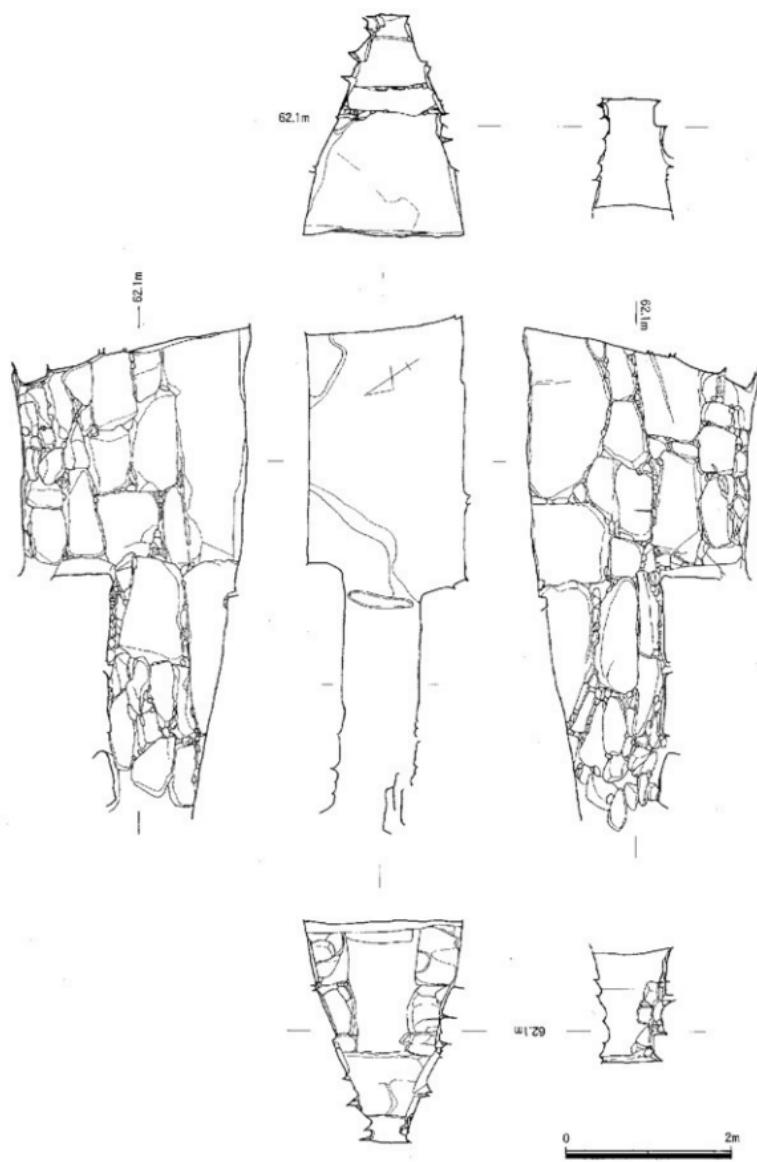
#### 羨道

前述のとおり羨道部は床面検出まで至っていないため、床面近くの状況はわからない。羨道部の長さは右壁で2.92m、左壁が3.06mを測り、玄室左側壁の長さと概ね同じ長さである。羨道部の幅は約1mを測り、わずかに玄室から見て右方向にカーブしている。

玄門側半分の壁面は、高さ60cm前後の大きな腰石を用いている。この石は入り口に向かって石の上面が下降している。2段目は高さ約60cmの石、3段目は高さ20~25cmの薄い石を用い、各段は横方向に目地が通っている。一方入り口側は長さ50~70cm、高さ20~30cm程度の比較的小振りな石をランダムに積み、さらにそれらの石の間を小石で埋めている。天井石は3石で構成されており、壁面のある部分まで天井を横架している。掘り下げた範囲内では閉塞石はなかった。石室前面にあると推定される墓道・前部について未掘のためわからない。

玄室床面は上記の通りすでに破壊され、また羨道床面は未掘のため、床面直上で出土した遺物はないが、石室埋土及び床面の破壊土の中から、ガラス玉、耳環、鉄鏃、馬具、須恵器、土師器が出士した。少なくとも前4者は石室に伴っていたものと考えられる。

（米倉・大塚）



第5図 石室実測図

#### (4) 出土遺物（第6～9図、図版3・4）

遺物が出土した場所は石室埋土内と墳丘上・墳丘下に大きく分けられる。墳丘上及び墳丘下で出土した遺物はすべて須恵器・土師器である。以下、遺物の種類毎に述べる。

##### 須恵器坏（1～13）

1～4は坏蓋である。色調は黄灰色～灰色を呈し、胎土には概ね1mm以下の白砂をやや多く含む。調整は外面天井部付近がヘラケズリ、その他は両面とも回転ナデで、1の内底面は指ナデである。焼成は3を除いて良好である。1は口径13.1cm、器高3.9cmを測る。天井部は平坦で、体部はやや外弯気味に立ち上がる。天井部にヘラ記号がある。2は復元口径14.4cmを測る。体部はほぼ直行して立ち上がる。3は復元口径13.4cmを測る。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。4は口縁部と天井部は接合せず、図上で復元した。復元口径14.8cmを測る。扁平な摘みを持つ。破損しているが、返りがつく。

5～3は坏身である。色調は黄灰色～灰色・青灰色を呈し、胎土には概ね1mm以下の白砂をやや多く含む。調整は外面底部付近がヘラケズリ、内底面は指ナデ、その他は両面とも回転ナデである。焼成良好である。5は口径11.5cm、器高4cm、最大径14cmを測る。立ち上がりは直行する。体部につながる受け部下方はヘラなどによる調整で直線的な仕上がりになっている。6は復元口径10.6cm、最大径13.2cmを測る。内傾する立ち上がりはゆるやかに外反し直行する。また立ち上がり外面には段を有する。底部にわずかにヘラ記号がある。7は復元口径11cm、最大径13cmを測る。内傾する立ち上がりは小さく屈曲して直行し、受け部は水平に小さく引き出す。8は口径11.2cm、器高3cm、最大径13.4cmを測る。内傾する立ち上がりは緩やかにカーブしつつ、やや外反気味に小さく摘み上げる。9は復元口径11.4cm、最大径13.6cmを測る。10は復元口径9.6cm、最大径12.2cmを測る。11は復元口径11.2cm、最大径13.8cmを測る。立ち上がりはやや反り気味に内傾し、受け部から立ち上がりにかけてもゆるやかなカーブを描く。12は口径11.1cm、最大径13.3cm、器高3.6cmを測る。立ち上がりは短くつまみ上げる。13は復元口径15.2cm、最大径18cmを測る。受け部付け根にわずかな段を有して立ち上がりにつながる。他の坏蓋に対して大きめである

##### 土師器高坏（14）

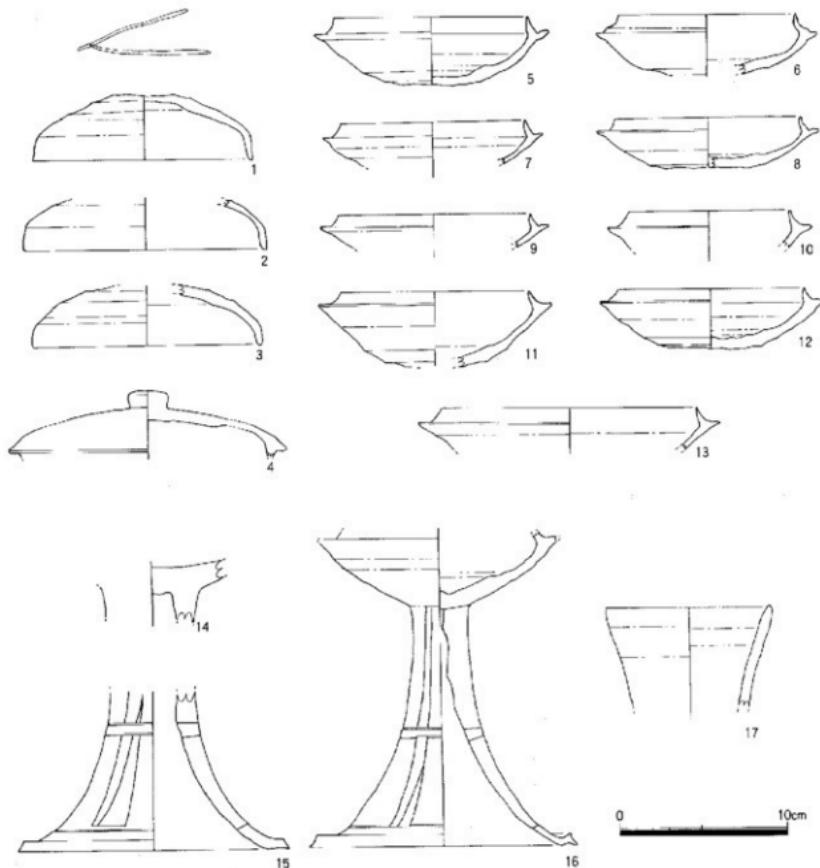
14は脚上部・坏底部の小片である。器向の保持が悪く、調整等は不明である。

##### 須恵器高坏（15・16）

15は脚部径16cmを測る。三方向一段透かしで、透かしは貫通している。調整は両面とも回転ナデで、薄黄灰色を呈し、胎土は精良である。16は脚部径16cm、残存高18.5cmを測る。三方向長方形二段透かしである。調整は外面と内面下部が回転ナデ、内面上部はナデである。

##### 須恵器半瓶（17）

17は復元口径10cmを測る。口縁部はわずかに外反ぎみに直立している。調整は回転ナデで胎土には1mm以下の白色粒を含んでいる。

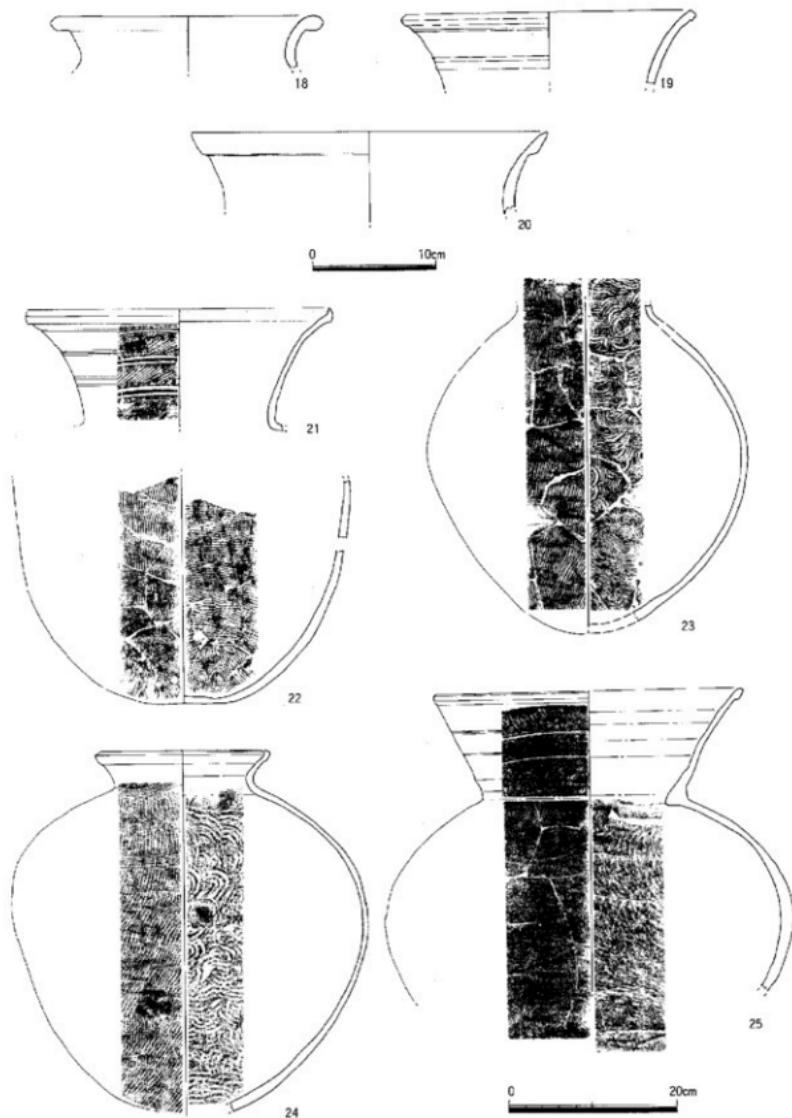


第6図 出土遺物I

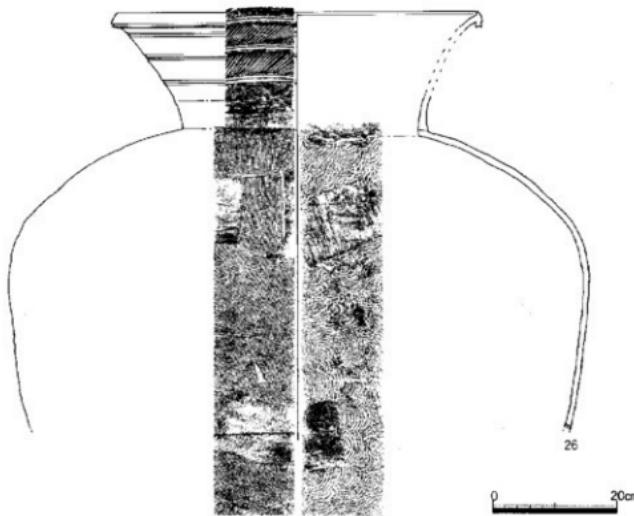
須恵器甕（18～26）

18は口縁部が短く、急激に外反し、口縁端部を丸くおさめている。復元口径22.8cmを測る。調整は不明である。19はやや外反する口縁部片で、端部は平坦面を作っている。口縁部中程に2本の浅い横方向の凹線を施している。調整は内面はナデで、外面は凹線より上が回転ナデ、凹線より下が横ナデである。色調は外面が黒灰色、内面が黄灰色を呈している。20は長めの外反する口縁部片で、端部はかまぼこ状を呈している。復元口径は30cmを測る。調整は両面とも回転ナデで、焼成は良好である。

21は復元口径37.6cmを測る。頸部から口縁部にかけてはゆるやかに外反し、口縁端は内唇を内側につまみあげ、外唇をわずかに下方向につまみ出している。外面口縁部下に1条、その下1.3cmに2条、さらにその下1.5cmに2条の沈線を施し、口縁部全体を3分割している。その3分割の間には、左斜下



第7図 出土遺物II



第8図 出土遺物III

方向へ斜線文が施される。調整は両面とも回転ナデで、頸部近くの外面は指ナデを施している。色調は青灰色で、焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色粒を含む。

22は最大径42cmを測る。底部はほぼ平坦である。内面の調整は、胴上部が平行文の当て具が縦または斜方向に施され、部分的にナデている。胴下部は平行文の当て具痕が縦横に任意に施され、その上より縦方向のナデが部分的に施されている。内底面は平行文の当て具痕の上から任意に指でナデ消している。外面は、胴部が縦方向に木目直行の平行タタキを施した後、横方向にカキ目を任意に施す。底部は同様のタタキの後カキ目を施し、タタキ目を消している。色調は灰色～青灰色で焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色粒を若干含んでいる。

23は最大径40.2cmを測る。内面の調整は、頸部つけ根が回転ナデ、胴上・中位が同心円文、下位が同心円文の上から平行文のタタキを横方向に施している。外面は、胴上・中位がやや左斜めの縦方向の平行タタキを施し、その上にカキ目を任意に施している。下位は縦方向のタタキである。色調は黄灰色～青灰色で、胎土は精良である。焼成は赤褐色をなすところがあり、熱の回りにムラがある。

24は口径22.3cm、最大径45.3cm、推定器高約7cmを測る。口縁部は短く外反し、内唇をつまみ上げ、外唇は厚く張り出す。胴部はやや肩が張った球形で、底部は平底に近い丸底である。口颈部内面は回転ナデ、頸部外面はカキ目を施している。胴部内面は同心円文、外面は木目直交のタタキ目が右上がりに数回施される。胴中位よりタタキ目の上からカキ目が頸部付け根まで施されている。

25は復元口径39cm、最大径52.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾し、端部は外に張り出し、1条の沈線を施している。口縁部中程には2本の沈線を施し、口縁端部から上の沈線間まで波状文を施している。また頸部付け根の内面は補強のため厚くしている。胴部内面は同心円文をナデ消し、外面は胴最大部より上位は木目直交の平行タタキを縦方向に施した後、丁寧にナデ消している。下位は横も

しくは左下がり方向のタタキ目をナデ消しているが、やや雑である。焼成は赤褐色の部分があり、悪い。

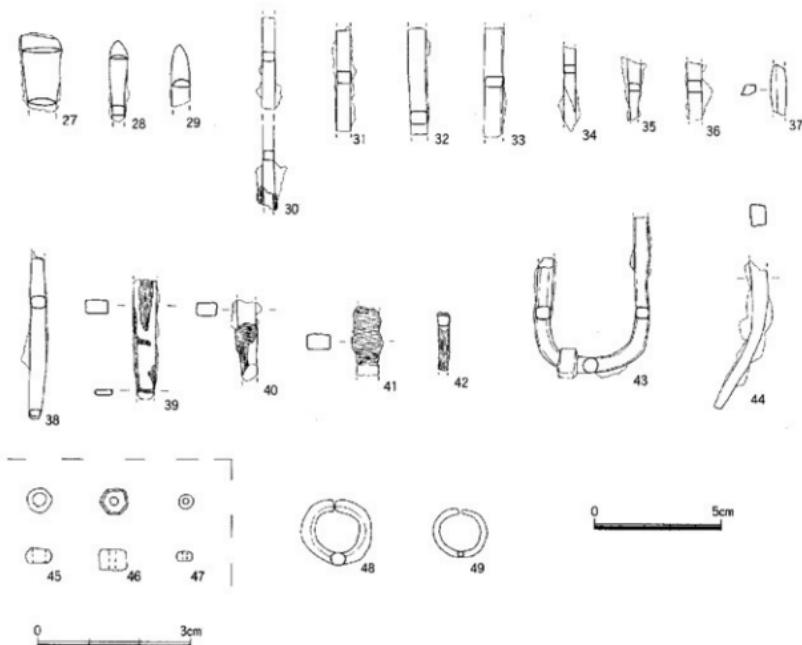
26は口径57.4cm、最大径93.6cmを測る。口縁部内唇をつまみ上げて丸くおさめ、外唇には1条の沈線を巡らし、さらに斜め下方に摘み出している。口縁部から頸部にかけて2条の沈線を3ヶ所巡らしている。口頸部は両面とも回転ナデ、胴部内面は同心円文、外面は木目直交の縦方向の平行タタキを施している。色調は内面が黄灰色～灰色、外面が黄灰色～黒灰色で焼成は良好である。胎土には1mm以下の白色粒を若干含んでいる。

#### 鉄鎌 (27~42)

いずれも石室埋土中より出土した。27は方頭鎌である。鎌先端部より徐々にすぼまっていく。鍔はない。現存長3.0cm、最大幅1.7cmを測る。28・29は長頭鎌の鎌身部である。28は現存長2.3cm、鎌身幅0.75cm、29は現存長2.5cm、鎌身部幅0.7cmを測る。30~42は身の破片で、39~42は矢柄の木質や樹皮が遺存している。

#### 鮫具(43)

43は鮫具である。現存の長さ6.2cm、幅4.5cmを測る。側面は直線的で、断面形は長方形を呈し、厚みは0.6cm×0.5cmを測る。留金具の一部が残存している。



第9図 出土遺物IV

#### 鞍 (44)

44は鞍の座金具ではないかと考えられる。全体が弓のように湾曲している。現存の長さ6cmを測る。断面形は略長方形で、最も厚い部分は0.9cm×0.6cmを測る。

#### ガラス小玉 (45~47)

45は外径0.5cm、内径0.25cmを測る。スカイブルー色を呈している。46は外径0.5cm、内径0.15cmを測る。紺色を呈している。カット面を良く磨き上げている。50は外径0.3cm、内径0.1cmを測る。コバルトブルー色を呈している。

#### 耳環 (48・49)

石室埋土から出土した。48は長径2.8cm、短径2.6cmを測る。銅胎で、金箔は認められない。49は長径2.2cm、短径2cm、厚さ0.2cmを測る。銅胎で、金箔は認められない。

(大塚)

## 第四章　まとめ

今回の調査では、前述のとおり前方後円墳の調査としては極めて限定的な調査となってしまったため、引き続いて第2次調査を行っているが、ここでは第1次調査で判明した事実を簡潔にまとめておきたい。

### 立地

古墳は北東に伸びる痩せ尾根上に築造され、前方部を尾根先端に、後円部を尾根上方に配置している。今宿平野の大型前方後円墳が標高40mより低い丘陵先端部に立地するのに対し、標高60m付近の丘陵中腹に作られている。前回調査した谷上古墳に立地的に通ずるものがある。痩せ尾根のため墳丘の築造は大きな制約があったものと推定できる。

### 墳丘

今回はくびれ部近くを調査したのみで全体の様相は掴みようがないが、現状と調査した範囲内でまとめる。墳丘全長は27m前後、後円部径16m前後を測ると思われる。くびれ部幅は8.5mを測り、主軸をN-46°-Eにとる。墳丘には段築・疊石・埴輪の樹立は認められないようである。墳丘は尾根に沿って後円部から前方部へと加工し、後円部頂と前方部頂の現況のレベル差は約2.5mを測る。後円部の南西側、つまり山側は現況でも馬蹄形の丘尾切断が確認でき、後円部は地山整形で墳裾を作っていることが想像できる。前方部は概から1mほどの高さまで地山整形を行い、裾部は平坦面を作り出している。トレッチをあけた部分では地山整形を行った上に、1mほど土を盛って墳丘を構築している。前方部先端は盛土の量が多いことが予測できよう。正確な計測値や全体の形状については現在は明らかではなく、2次調査の結果を待ちたい。

(米倉)

### 内部主体

本古墳の内部主体は單室両袖の横穴式石室である。主軸はN-64°-Wで、北西に開口し、古墳の主軸とは約70°東に傾いている。玄室の平面形は長方形を呈し、長幅比は右壁で1.67:1、左壁で1.46:1を

測る。石室の構築には1ないし2個の大きな腰石を用い、それより上は、奥壁が各段1石で、側壁は各段2~4石の比較的大振りな石を用いている。羨道部の長さは右壁で2.92m、左壁が3.06mで、玄室と羨道部の長さの比率は1:1~1.14:1を測る。

当古墳の石室は長方形プランの玄室に玄室長と同程度の長さの羨道を接続するタイプであり、柳沢氏の類型によるとⅡ類型石室に相当する。また今宿及び糸島平野における類似の石室をあげると、神在上ノ山1号墳がもっとも似る。同墳はⅢB期の新しい頃からV期の須恵器が出土しており、6世紀後半中頃の築造が考えられる。また若干玄室長が短いものの、玄室の形態は徳永アラタ古墳群の1・3・6号などが比較的当古墳と近い形態を持つ。ただし、1号は羨道が短く、3号は複室、6号は羨道が長い。柳沢類型によるとⅡ類型石室に伴う最古の須恵器はⅢB期で、今宿・糸島平野の他の古墳も同じ様相を呈している。つまり、石室の形態からは須恵器九州編年のⅢB期、6世紀第4四半世紀頃の築造が考えられる。

(米倉・大塚)

#### 出土須恵器から見た年代観

出土遺物のうち年代を的確に示すのは須恵器、それも壺及び壺蓋である。出土した壺蓋は口径13~14cm代のものや、丸みが少なく扁平過ぎるものであり、口縁部の立ち上がり形態からもⅢBでも新しい時期、もしくはIVA期に比定して大過ないものと考えられる。一方壺身では、口縁部立ち上がりは内傾して低く、器高が高く、底部がやや丸みを帯びるものと、さらに立ち上がりが低くなり、器高が低く扁平なものがある。

高壺についても長脚二段透かしでⅢB期に比定されるもの、甕においては外反した口縁部に肥厚した口縁端、タタキの後のカキ目などの調整、縁部に波状文を施すものや斜線文を施すものなど、陶邑編年のⅡ~4~5に比定されるものが見られるなどのことから、九州編年のⅢB期でも新しい時期~IVA期と考える。またこれらの時期のもの以外に、IVBからV期と思われるかえりのついた壺蓋が1点のみではあるが、出土している。

以上の点から、出土須恵器を見る限りでは6世紀第4四半世紀頃に築造し、7世紀前半までの追跡が考えられる。

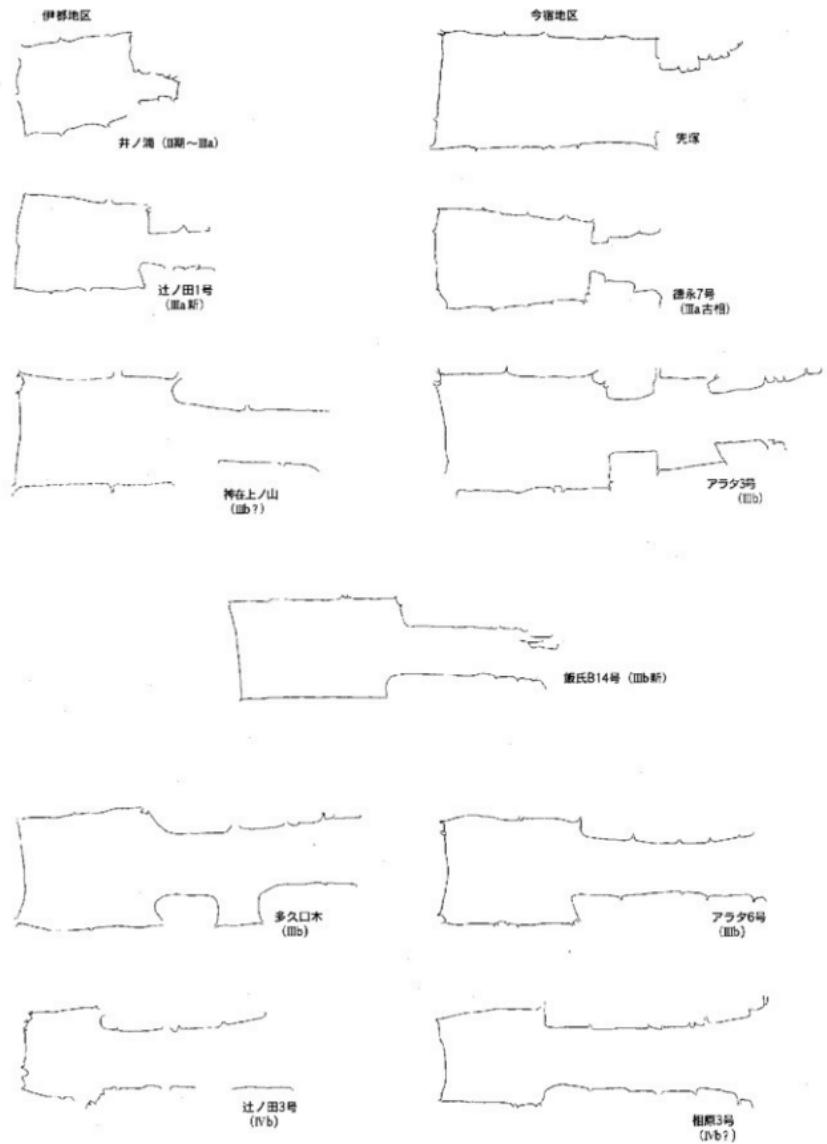
(大塚)

#### 総括

今回はかなり限定的な調査で、2次調査が行われることから最終的な結論をここで出すことは差し控えたい。墳丘の規模や構造、古墳の年代等、現在知り得た情報からのみまとめたが、2次調査の結果明らかになるものと思う。現時点では、出土遺跡からみれば6世紀第四半世紀頃の構築であるが石室形態からみれば6世紀中頃まで逆上の可能性が考えられる。

今宿平野の平野部もしくは丘陵先端部における大型前方後円墳は、6世紀前半を最後に姿を消している。その後、谷上古墳や当古墳のように丘陵の奥に小形の前方後円墳を築造するようになる。当古墳以外で、現在今宿・糸島平野でもっとも新しい前方後円墳は谷上古墳であるが、同古墳は調査者によると6世紀前半から中頃の築造とされており、現在考えられている当古墳とは若干の時間差がある。谷上古墳は高祖山から伸びる東側の丘陵上にあり、今宿平野向きの古墳と言えるが、当古墳の場合は西端近くの丘陵上にあり、むしろ糸島平野向きの古墳と言える。今後、両地域の古墳を詳細に調べ、かつ本墳の詳細な情報が2次調査で明らかになれば、前方後円墳の終末時期に関して大きな資料となるものと考えられよう。

(米倉・大塚)



第10図 伊都・今宿地域の横穴式石室 (1/100)

図版1



調査前の状況と遺物出土状況

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1 後内部現況（北東から） | 2 北側くびれ部現況（東から） |
| 3 後内部現況（北から）  | 4 石室入口現況（北から）   |
| 5 第1区遺物出土状況   | 6 同左            |
| 7 第2区遺物出土状況   | 8 同左            |



石室の状況

- |           |           |          |
|-----------|-----------|----------|
| 1 玄室左壁と奥壁 | 2 玄室奥壁    | 3 玄室から通道 |
| 4 玄室天井    | 5 玄室右壁と奥壁 |          |

図版3



1



2



3

土層断面とくびれ部の状況  
1 第2トレンチ土層  
3 第2区全景(東から)



4

2 第1トレンチ土層  
4 第1区全景(東から)

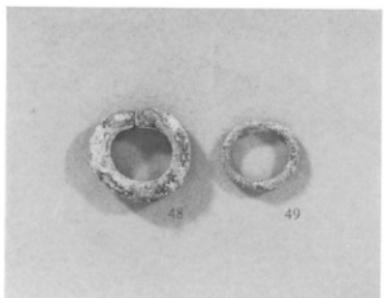


出土鉄器



44

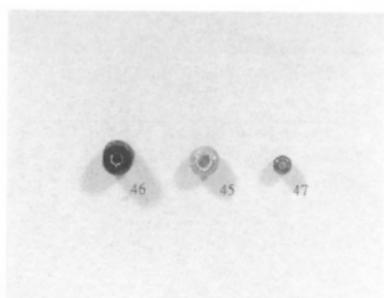
45



48

49

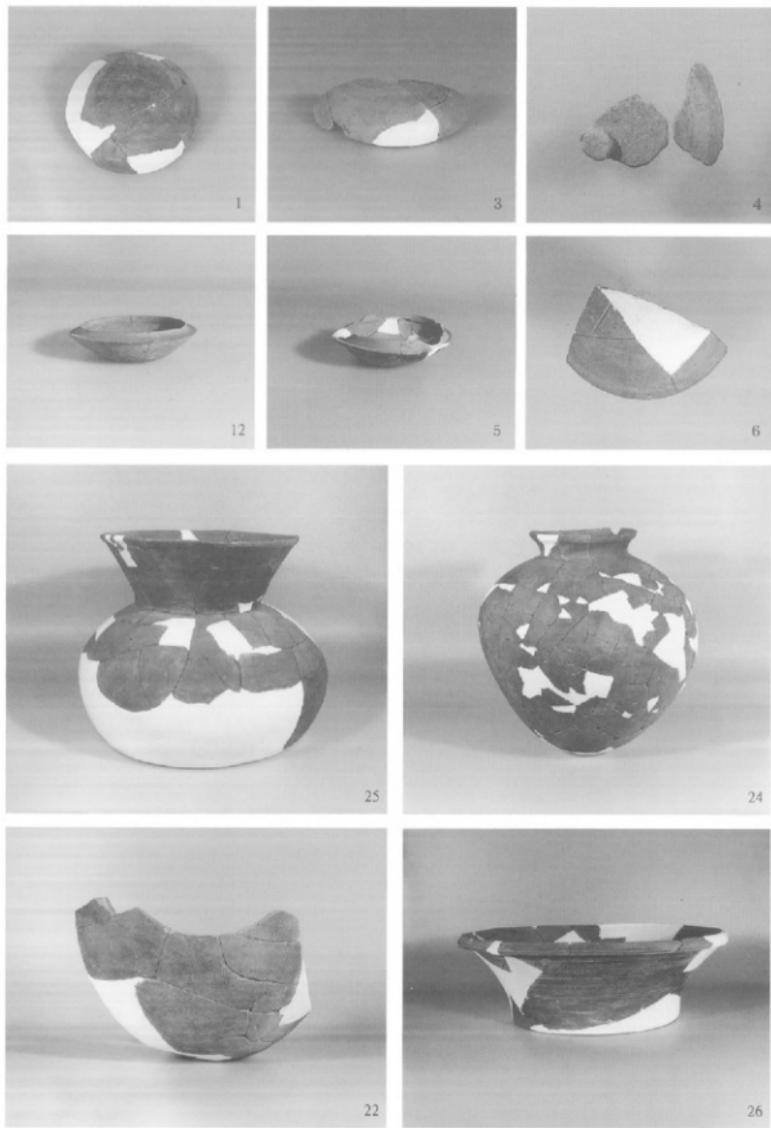
出土遺物 I



46

45

47



出土遺物 II

## 飯氏古墳群B群第14号古墳

福岡市西区飯氏所在前方後円墳の重要遺跡確認調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第584集

1998年(平成10年)3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 松井印刷株式会社

福岡市博多区板付6丁目9-2